

大学出版

The Association of
Japanese University Presses

No.137

2024.2

冬

■大学出版部協会創立六〇周年

変化の時代を乗り越える

橋元博樹

1

●記念講演

民主主義と学問が支える社会へ

宇野重規

3

「One Team」の営業部会をめざして

土橋由明

14

●鼎談

本づくりと棚づくりに魅せられて

慶應義塾大学出版会×ジユンク堂書店

村上文×森暁子×井手ゆみこ

16

『連載』何年経っても忘れられない、編集者の一冊『12』

八木晃二著

『超ID社会』——ビッグデータ、IoT、AIスコアリング時代に、プライバシーと自分像をいかに守るか』

真下恵美子

表2



大学出版部ニュース

26



一般社団法人
大学出版部協会

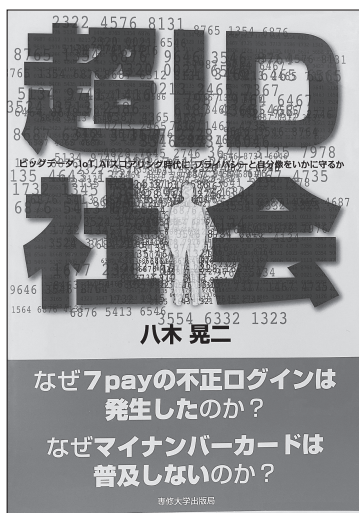
大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

何年経っても忘れられない、編集者の一冊《12》

八木晃二著

『超ID社会——ビッグデータ、IoT、AI
スコアリング時代にプライバシーと自分をいかに守るか』

真下恵美子（専修大学出版局）



カバーは、人びとを取り巻き飲み込みそうなIDのイメージを想起させるデザインとした。

装丁：尾崎美千子・印刷：亜細亜印刷
印刷〔専修大学出版局・2020年／A5判 並製・216頁・定価2420円〕

専修大学出版局の役割のひとつに学内の教員や課程博士論文（以下博論）の出版がある。とくに博論の刊行には本学独自の刊行助成が使われ、この助成制度は研究者が書籍を出版することに一役買っている。今まで博論の出版をいくつも手掛けてきたが、やはり印象に残るのは書籍化することに対する熱量の高さであろう。なかでも本書『超ID社会』は、学術図書でありながらも少しでも多くの人びとに知ってほしいという著者の熱量が、ひときわ高く感じられた作品であった。

本書は、ID (Identifier) にかかわる多くの人に手に取ってほしいという思いから、並製にすることで価格を抑えめとした。書名は、いかにも学術論文のタイトルであったものをまったく変更して、スッキリ明快な「超ID社会」とした。中身はあくまで論文をベースとした学術図書という「枠」を保ちつつも、読みやすさを図るためレイアウトなどを工夫した。さらには、扉や付録などを活用することにより、どのように書籍の中の情報にアクセスしやすく・使いやすくてきるか、著者と詰めていった。

『超ID社会』刊行はちょうどセブンペイ不正アクセス騒動の直後であり、加えてマイナンバーカードの普及が進まず、そのセキュリティに対する不安などの話題に事欠かなかったところである。また、一人ひとりが所有するIDが軽く二桁にのぼる現在、その管理とセキュリティについてはそれぞれ不安を抱えている人も多く、現代社会にとってIDへの対応は喫緊の課題といえよう。著者は氾濫するIDの在り方について数年にわたり真正面から取り組み続けてきたこともあり、混在して使用されているIDの定義、その課題と解決策について熱く語られる姿が今でも鮮やかによみがえる。

本書で多く語られているマイナンバーは、政府の後押しのなかどんどん進んでいるが、まだまだ未熟なID社会において、本書がIDの考え方・あり方を見つめる際の一助になってほしい。

■ 大学出版部協会創立六〇周年

変化の時代を乗り越える——六〇年の軌跡と今後の展望

橋元博樹 (大学出版部協会理事・東京大学出版会)

新型コロナウイルスに関する規制が緩和された二〇二三年の五月、わたしたち大学出版部協会は設立六〇周年を迎えました。時節柄大々的な式典は行わなかったものの、年次総会は三年続いたオンライン総会から出版クラブでのリアル開催に切り替え、久しぶりに一堂に会した会員・賛助会員が、記念のご講演をされた宇野重規東京大学教授とともに、この節目を祝いました。

当協会の歴史は一九六三年にさかのぼります。同年六月、一〇校(団体)の代表者により本郷の東京大学出版会館にて設立総会が開かれました。翌七月には白金迎賓館で設立披露パーティーを開催しています。この門出が大学と社会の大きな期待を背負っていたであろうことは、祝辞リストに文部大臣や各大学総長・学長の名が連なっていることからも想像がきます。それでも、モデルとする事例が唯一アメリカの大学出版部協会のみという、手探り状態のスタ

ートだったはずです。

以来、任意団体から有限責任中間法人へと、そして公益法人制度改革にともない二〇〇九年には一般社団法人への移行と、法的にも社会的責任をもった社団へと推移してまいりました。

設立から六〇年が過ぎ、いまや出版をめぐる状況は大きく変化しています。同時に大学やアカデミアの状況も大きく変わってきています。

変化のひとつは言うまでもなくデジタル化という言葉に集約されるでしょう。世界の学術出版の分野では、二〇〇〇年を前に、主に自然科学系の分野で英文ジャーナルのデジタル化がスタートいたしました。価格高騰問題による図書館からの反発などがありながらも、その趨勢は変わることなく、いまやジャーナルの投稿数が研究業績評価を定めてしまうという状況が現出しています。こうしたなかでわ

たしたちは「書籍」出版の意義をあらためて考え、その価値を提示しなくてはなりません。

もちろん、わたしたちも電子事業に着手しなくて良いというわけではありませんし、実際、この一〇年間で多くの加盟出版部が電子書籍事業を開始しています。国立国会図書館のデジタルアーカイブを見るまでもなく、社会インフラとしての書物のデジタル化への期待は大きいと言わねばなりません。紙の書籍がなくなることはいとしても、未来に向けた出版の多様性を考えるならば、学術書のデジタル化は急務です。

もうひとつの大きな変化は国際化です。学問の国際化がさらに促進される状況において、多くの研究者が海外に目を向けています。アカデミアでは、ジャーナルのみならず書籍においても英文出版が求められています。そのなかで、わたしたちは日本で日本語の書籍出版を続けることの意義を考えながら、その世界への発信、そして英文図書の刊行事業も促進したいと思います。電子書籍やプリントオンデマンドを利用すれば、海外への流通は以前とは比べ物にならないほど障壁が低くなりました。

また、北京国際図書館、フランクフルト国際ブックフェア、ソウル国際図書館展、北米アジア学会に、それぞれ参加・出展し、書籍販売・版權売買のみならず、世界の学術出版関係者との交流が続いています。とりわけ韓国の大学出版協会とは四一年におよぶ親密な交流を継続し、コロナ禍に

よる中断はありましたが、近年は両国間を一年交代で相互訪問し合同シンポジウムを開催しています。

国際化とデジタル化はわたしたちにとって、なにもしなければ確実に脅威となりますが、適正にとりくめば、未来の大学出版を形作る絶好の機会であるともいえます。

最後に、国内の流通問題を付け加えます。現在、出版をとりまく状況は必ずしも樂觀視できるものでありません。大型書店の減少、物流コストの高騰、取次会社の経営不振など問題は山積しています。そして、「出版不況」を打開すべく、多くの業界関係者が改革を講じています。ただしそれらが必ずしも学術書籍出版の持続性を担保するものとは限りません。出版業界の一員として改革に協力すると同時に、学術出版の未来のために、当協会として独自の活動が続けていくことが求められています。

関係の皆様の一層のご支援をお願いいたします。

* 本稿は、『大学出版部協会の歩み 2018-2023年』（二〇二三年）掲載の文章を加筆修正したものである。

■ 大学出版部協会創立六〇周年【記念講演】

民主主義と学問が支える社会へ

——日本学術会議問題から考える

宇野重規

(東京大学教授)

このたびは、大学出版部協会六〇周年おめでとうございます。本日は政治と学問、そして出版についてお話ししたいと思います。まずは、学術会議問題から入っていきましょう。

学術会議問題と民主主義

あれは二〇二〇年一〇月の出来事ですので、まもなく三年になろうとしています。世の中の記憶もだいぶ怪しくなってきましたが、私には大変なことでした。すっかり有名な人になり、テレビに何度も自分の顔が映るようになりました。近所のクリーニング屋の店員の方まで、「先生見たわよ。頑張つてね」と言われました(笑)。加藤陽子先生はじめ任命拒否された先生方とお話する機会を得て、『学問と政治——学術会議任命拒否問題とは何か』(岩波新書、二〇二二年)という本を一緒に出すことになりました。

騒動が起こったとき、新聞社から声明を出すよう依頼を受けました。通常、公に物を書くときはそれなりに時間を掛けて考えるものですが、その時は突然、あと一、二時間で書くように強いられ、必死に書きました。

何かにとりつかれたように書いた文章の前半は、学術会議の現会員から同僚としてご推薦いただいたことは大変名譽なことであり、内閣に任命されなかったことについては特に何もコメントしないというものでした。私は研究者です。研究者としての活動を今後も変わらず続けていきますし、新聞などにも多く書いているという点ではある種の言論人でもありますから、言論活動もきちんとやっていく。今回の事件とはまったく関係なく、自分はやるべきことをやり続けると申し上げました。

これがどのように受け取られたのかは、よく分かりません。もっと積極的に抵抗すべきではないか、やや消極的に

過ぎるのではないか、と批判する親しい友人もいました。

しかしながら、私としてはこれが最も適切な抵抗、つまり、自分は一切、この事件によって心を動かされていない、やるべきことを今後もこれまで通り平常心でやっていく。そのようなスタンスが一番の抵抗であると考えました。

声明の後半が、以下のようなものです。

民主的社会を支える基盤は多様な言論活動です。かつて自由主義思想家のジョン・スチュアート・ミルは、言論の自由が重要である理由を以下のように説明しています。もし少数派の意見が正しいとすれば、それを抑圧すれば、社会は真理への道を自ら閉ざしたことになります。仮に少数派の意見が間違っているとしても、批判がなければ多数派の意見は教条化し、硬化化してしまいます。

言論の多様性こそが民主的社会を支える根幹的な原理であると感じたので、このことをあらためて強調したいと考えました。多様な意見の存在を否定してしまうならば、そして仮に少数派が正しい意見を言ったときにそれを潰してしまうならば、その社会は正しい意見に辿り着けなくなります。逆に少数派の意見が間違っていたとしても、それを叩いてしまうなら、多数派の人たちはこれで良いと思い、それ以上深く考えなくなる。これは社会にとって損失になるというのが、自由主義者であり、功利主義者であるジョン・スチュアート・ミルらしい言論の自由、あるいは民主

主義の擁護だと思つて書きました。

ちなみに、学術会議問題が明らかになった同じ一〇月、私は『民主主義とは何か』（講談社現代新書）を出版しました。これはまったくの偶然です。自分の書いた本が、自分に代わつて、より雄弁に自分のことを説明してくれたと思つています。本でもミルの話をしていますが、これを書いていたときは、もちろんこのような事件が起きるとは考えていませんでした。

私は日本の民主主義の可能性を信じることを自らの学問的信条としていますが、これを声明でも最大のメッセージとしました。その信条は今回の件においてもいささかも揺らぎません。民主的社会の最大の強みは、批判に開かれ、常に自らを修正する能力にあります。その能力がこれからも鍛えられ、発展していくことを確信しています。

ところで、私の友人である慶應大学の坂井豊貴さんが、『多数決を疑う——社会的選択理論とは何か』（岩波新書、二〇一五年）という面白い本を書いています。そのなかで、単純多数決で三つ以上の選択肢があるときに、民主主義的に単純多数決をとると、ロジカルでない、誰も望んでない結論にしばしば陥ることを、非常に簡単な数学的証明を用いて書いてあります。多数決が民主主義とイコールではないというのは私の本のポイントですが、多数決ひとつ取つてみても、実によく過ちを犯す仕組みであり、決してパーフェクトではありません。

それでもなお民主主義が必要かと言えば、民主主義はしばしば間違ふものの、多様な人が参加するなかで、時間の経過にあわせて多数派の意見が批判され、あっち行ったりこっち行ったり迷走しつつ、時間を掛ければ最後は必ず適正な方向に戻ってくるからです。

独裁国家はそうではなく、賢い独裁者がいた場合は一時的に良いことがあるかもしれませんが、独裁者が迷走したときは誰も止められない。ウクライナ戦争でプーチンをはじめとする独裁的指導者の恐ろしさを実感している我々にとっては、分かりやすい話と言えるでしょう。

それに比べると、民主主義社会は、一時的におかしな判断をしても、長い目で見れば必ず自己修正能力を持っている——こういうことを書きました。



「パーティー (Party)」 という知恵

『学問と政治』のなかで、私は他の皆さんとは違う書き方をしていると言われることがあります。たしかに、今回の事件の問題点を、歴史や法律の点から丁寧に説明した他の執筆者と比べると、私だけ全然調子が違います。対話調

で書かれていて、AくんとBくんが現れて「やあ元気」から始まり、パート2に至っては「このあいだの正月何やった？」という対話から始まります（笑）。ただし、内容は至って真面目なものです。

私の文章は前半と後半に分かれています。まず前半を紹介したいと思います。私の嫌いな現代の言葉の一つに、「反日」があります。皆さんもSNSなどでしばしば耳にされると思いますが、人を罵倒するときや自分が気に入らない人に対して、「反日」という言葉が平気で使われる。裏を返せば、「自分こそが日本そのものだ」と言っているわけですから、ある意味で僭越と言えるでしょう。なぜあなたが日本を代表していると言えるのかと聞きたくなります。

同じように、学術会議問題のときに私がよく言われたのが、「反政府的」という言葉です。「反政府的」って何なのでしょう？ なるほど、素朴に考えれば、政府の見解と違うことをいえば反政府的だという理解もあるでしょう。しかし果たして、時の政権と違うことをいったら反政府的なのでしょうか？ 私は、それは違うと思います。

「政党」という言葉があります。英語でPolitical Party（ポリティカル・パーティー）、あるいはParty（パーティー）です。それでは「パーティー」はどういう意味でしょうか？ パーティーは「宴会」ではありません。part（パート）すなわち「部分」という意味からきている言葉です。「政党」

という上品な言葉で訳しているから分かりにくいのですが、「派閥」「分派」「党派」などと訳すとピンとくるのではないでしょうか。これが何を意味するかというと、政党というのは分派であり党派であって、部分利益に過ぎないということです。

それとの関連では、「パーティー」をめぐる幕末のエピソードがあります。幕末の日本の知識人はセンスが良く、西洋のことをよく理解していますが、その彼らもこの「パーティー」だけはよく分からなかった。「イギリスでは、国会の議事堂の中で、パーティーの連中が、大声で演説している」と書かれたものを見て、儒学などで知的武装した幕末知識人たちは頭を抱えたのです。「パーティー」を辞書で引いてみると「党派」「分派」と書いてある。党派や派閥の連中が、国会の真ん中で大声で話しているのであり、「そのどこが良いのだ、そんなのけしからんだらう」と思ったわけです。世の中は公共の利益に従って、党派的な分派ではなく社会全体の利益に従って行動するのが正しいはず。そうだとすると、部分利益の代表者が国会で、大声でがなり立てるのは愚かしくてよろしくない。党派は国家を分裂させると幕末の知識人は考えたのです。しかしそれがイギリスの議会政治の本質と書いてあるから、彼らは頭を抱えることになる。

民主主義が生まれた古代ギリシャでも、「党派」や「分派」は否定的に語られました。社会の公共の利益を実現するの

が政治であって、党派などという連中が出てくると国が分裂し、悲惨なことになる。だからいかにして党派や派閥を無くそうかと、古代ギリシャの人々は考えた。

ところが近代の自由な社会では、異論を言う人が必ず出てきて、派閥が生まれる。それは好ましくないこともあるけれど、それを完全に否定するともっと悪いということ、それならば一定範囲で認めるほうがマシだという議論が一八世紀頃から起ります。ヒュームという哲学者は、分派とか派閥を認めようじゃないかと言うのです。ただ、タチが悪いのと比較的马シなのがあるから、マシなほうだけ認めようと言います。何がタチが悪いかと言うと、例えば宗教的な信念に基づく党派は、ほかとは絶対に相入れないところがあるから、なかなか難しい。その点、利益の対立は比較的马シだと。利益の対立は妥協の余地もあるからです。信仰や絶対的な信念の対立は容易に埋めがたいから、比較的马シな利益的な党派対立については認めるほうがかえって良い、とヒュームは言います。面白い発想ですよ。

ですから、政党について勘違いしている人がとても多いのではないのでしょうか。特に政権党の立場になると、国家を体現している自分たちに向かって異論を言うのはけしからん、という人が多い。しかし、政党というのは本来「党派」であり「分派」なのです。それが本来的に良いものかどうか議論はありますが、それを否定するよりは、むしろ党派の活動を、裏の隠れたところでコソコソやるのではな

く、表舞台である国会で、みんなが見ている前に堂々と出て、言葉や言論によって自らの立場を闘わせる。そうすることによって、党派の悪い部分が比較的抑えられ、良い部分が出てくるという信念があるのです。大切なのは、つねに異論があることなのです。

また、クロード・ルフォーールというフランスの政治学者は、民主的社會において「権力の場」は空虚だと言います。昔は政治空間の真ん中に王様がいた。王様が賢いかどうかはともかく、王様が王国の真ん中にいるからこそ、社會が安定するという側面もあった。ところが、民主的社會はその真ん中にいる王様を引きずり降ろしてしまった。そして、かつて王様がいた場所、すなわち「権力の場」を空けて、あえて空虚のままにした。これが民主的社會のポイントだと言います。要するに、民主的社會では、現在たまたま権力の座についているからといってその人々が正しいとは限らない。真理を担っているとは限らない。だからこそ、権力者といえども「俺が真理だ、俺が絶対だ」とは言えない

ということなのです。政党がある時期に政權に就いたとしても、それは暫定的にその立場にあるだけで、もしその政權がおかしいことをすればたちまち叩き落とされる、というのがルフォーールによる民主的社會の説明です。したがって、政權党というのはその時点でたまたま政權を預かっている部分利益の代表に過ぎないのであって、その政策がおかしいときには叩き落とされるし、ましてや政權の考えに対して違うことを言うことが「反政府的」というのはおかしい。「権力の場」は空虚なままなのです。

また、近代社會の賢明さは、政党の発明のほかに、例えば「三權分立」、あるいは「権力分立」という言葉にも窺えます。これは権力を司法權・立法權・行政權の三つに分けるという「分離（セパレーション）」の工夫ですし、同じく政治と宗教を分離するという「政教分離」も近代社會の発明と言えます。

その意味で、西洋近代の基本的原則は「分離」「分割」なのです。それは「シビリアンコントロール」、すなわち

発見と刺激に満ちた斬新な日本語訳聖書

新約聖書 改訂新版

新約聖書翻訳委員会訳

A5判・定価8360円

最新研究を踏まえた訳語の大胆な工夫、周到な注釈により、新たな読解の可能性を開いてきた「岩波版新約聖書」。合本版初の改訂。

新約聖書

改訂新版

新約聖書翻訳委員会訳



原典に忠実な翻訳と周到な注釈が新たな読解の可能性を開く
新約聖書 改訂新版 全12巻 全12冊 全12冊 全12冊
大塚成子



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

www.iwanami.co.jp

政治と軍隊の分離にも窺えます。何でも分離するのが近代社会の原則であり、政治と学問も分離しなければいけないというのが、近代のひとつの知恵だったのではないのでしょうか。逆に言うと、普通は学問と政治はくっつきません。政治の側は、自分の権力を正当化するために哲学や思想を利用するなど、学問を利用する。これは太古の昔から見られることです。ながらく政治と学問はくっついてきましたが、ある時期にこの二つを分けたほうが良いという考えが出てきます。両者をあえて分離するほうが、双方にとっても良い——これが近代社会の大きな原則として発展してきたわけです。

ピアレビューから知の共和国へ

いま、大学は非常に揺れています。昨今の「一〇兆円ファンド」という話題に接していると、大学とは何のためにあるのか真剣に考えてしまいます。

みなさんをご存知のとおり、大学にはいくつかの起源があります。オックスフォードやケンブリッジなど、ヨーロッパ中世に生まれた大学は「組合」として始まりました。世の中には、自分の知識を誰かに教えたいと思う人がいる一方、それを知りたい、学びたいと思う人もいます。そうした人たちが同じ場所に居合わせ、それを保護する「組合」として始まったのが、中世の大学です。ずいぶん牧歌的だと思われるかもしれませんが、私はこの発想は意外と捨て

がたいと感じています。

これに対するのが近代国家です。近代国家は強い行政、官僚制を伴い、日本の大学も最初は国家の近代化のために設立され、整備されてきました。したがって大学は近代国家の要請に応えるものと理解されがちですが、明治から一五〇年がたち、第一の時期の帝国大学、第二の時期の国立大学を経て、次のフェーズに入ろうとするなか、現在は大学がもう一度再定義されようとしている瞬間だと思います。私が面白いと思う言葉の一つに「ピアレビュー」があります。学術出版の関係者は、この言葉をよく耳にされると思います。ピアレビューとは、学術雑誌に投稿した論文を掲載するかどうかを、同じ分野の専門家の査読に回して評価し、その上で査読者の意見にもとづき論文を修正し、最終的に掲載するか否かを決めていくことです。

ちなみに「ピア」とは何のことかお分かりでしょうか？これは「貴族」を指す言葉です。中世のヨーロッパの王様も、貴族のなかの一人、すなわち同輩者中の一人に過ぎず、必ずしも絶対的ではないというときに「ピア」という言葉を使ったのです。「ピア」というのは、俺たちみんな同じような貴族だろ、同等だろ、そういうニュアンスです。ですから「ピアレビュー」には、同等者たちが見るというニュアンスがあります。

これはつまり、誰か絶対的な権力者が「これは正しい、これは間違っている」とは言わずに、同じ分野の人たちが

(受賞作)

社会的身体の民族誌

深川宏樹著 ニューギニア高地における人格論と社会性人類学。人々のひしめきの総体から人間の変容可能性を展望。第30回辻澤賞。5500円

日本軍政下ジャワの華僑社会

津田浩司著 『共栄報』にみる統制と動員。歴史の空白を埋める精緻かつ立体的労作。2023年度地域研究コンソーシアム賞・作品賞。6600円

(ブックレット新刊)

ヴェネツィアのゲッター

李美奈著 商館・共同体・コンタクトゾーン。ユダヤ人のヴェネツィア社会への包摂と排除の両立を目指し、16世紀に誕生……。770円

中国殷代の青銅器と酒

内田純子著 発酵技術、酒を伴う饗礼、鑄造技術が響き合うように発展した殷代。精緻華麗なあの造形を生み出した時代を描く。770円

「新統忠臣図」

金子祐樹著 光海君の命で編纂された『東国新統三綱行実図』の「新統忠臣図」をもとに、時代が要請した「忠」の群像を紹介。880円

アーカイブのちから

伊東未来ほか著 痕跡や存在そのもの、転用・誤読・秘匿などの作為や来歴も含め、「情報の集積」なるものの本質に迫る。990円

手仕事を求めて

高道由子著 東ネパールのダカ織り工房の日常。祖母、水尻、ネパール……。現代社会とは対極の現場を巡る「ロードムービー」。770円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒 03-3828-9249 (定価は税込)
URL: <http://www.fukyo.co.jp>

お互いに評価することです。上から命令されたり基準を一方的に押し付けられたりするのではなく、対等である同じ専門の人たちがお互いに評価をし、一定の基準を自分たちでつくるという意味です。ですから、学問は一種の共同体であり、一つの国家のなかに限定されず、世界中にピア、同輩者がいて、その分野の基準やディシプリンなど学問のクオリティをしっかりと守ることによって維持されると言えるでしょう。厳しい自己規律と学問を守り育てるという理念にもとづき、お互いに共同制作していくものです。そのような意味では、現代社会はグローバルな知の共和国と言えます。「知の共和国」と言うとき大げさに聞こえるかもしれませんが、一八世紀ヨーロッパでは、「オム・ド・レットル (hommes de lettres) 」「文人」という言葉が流行しました。レットルは「レター」ですから、文字の人、つまり知的なものによって生きる人、文人たちのある種の共和国です。国家という共和国ではなく、知によって結び付いた共和国というのが、一八世紀的な世界の啓蒙的キー

ワードとしてあったわけですね。現在の二一世紀は、グローバル化のなかで、本当の「知の共和国」が実現しつつあるのではないかと。私自身、研究活動を通じて、あるいは英文雑誌の編集などを通じて、さまざまな世界の知識人や同輩と繋がっています。そういう意味では、近代が国家の要請に合わせて学問する時代だとすると、これからはもう一度、世界中で「知の共和国」をつくり、同輩者同士で学問を支え合っていく。そして、「教えた人」と「学びたい人」の組合をつくっていく時代ではないでしょうか。

自分が喋りたいことや大切にしていること、あるいは誰かに学んでほしいと願うことを喋ると、どこかでそれを学びたいと思っている人に届き、そして繋がっていく。教師と学生の組合という、かつてオックスフォードやケンブリッジであったような中世ヨーロッパ的な大学は、その意味で、とても良いものだと思います。教えた人々と学びたい人が自由にどこでもくっつく、そういう組合が必要なので



す。そしてそれを守らないといけない。妨害したり、介入したり、潰そうとする動きは絶対ありますから、安心感を抱き続けられるようしっかりと守り、学びたい人と教えたい人が、ときにはその立場を途中で入れ替えながら、学びの空間を築いていくことが大切だと思います。

その一方、政治と学問を切り離すことは大変です。政治は学問を利用したがりです、学問も一歩間違えると政治に結びつきます。学者も、場合によっては政治権力を求める。つまり、自分に理念や理想があるからこそ、その理想を実現するため政治権力に近づきたいという願望は、政治学者だけでなく、学者一般にもあると思います。それを一概に悪いとは言えませんが、政治と学問が無原則に妥協するならば、それは政治を歪めるだけでなく、学問も歪めてしまう。学問はあくまで、ピア、同輩者たちがお互いに厳しくチェックしつつ助け合いますることです。その意味では、最初に申し上げたように、私は学術会議で同僚の人たちから推薦されたことを名誉に思っています。学術会議問題を通じて、政治と学問の分離は決して過去の課題ではなく、現代の課

題であるということをしみじみ実感した次第です。

日本の学問の誕生

続いて『学問と政治』の後半を紹介したいと思います。そこでは、「正月何した？」という問い掛けに対し、登場人物が「実は小林秀雄を読んだ」と言い、『本居宣長』という小林最晩年の大作の話をしています。私はこの『本居宣長』という本を何回か読みましたが、挫折にくじけずようやく読み通したところ、なかなか面白い本だと気付いたのです。冒頭は本居宣長の墓が二つあるなどといううんちく話から始まりますが、そのあたりを飛ばすと、要は日本の学問の誕生を論じた本だということが見えてきて、感動しました。このなかで小林秀雄は、日本で学問が誕生したのは江戸時代だと言います。それも意外と早い時期、例えばその立役者が誰かという点では、中江藤樹を挙げています。中江は近江の国の聖なる人、「近江聖人」と呼ばれた儒学者で、一時期藩に仕えたこともありましたが、基本的に民間の立場で学問した人です。小林は、この中江藤樹から日本の学問は始まったと書いている。戦国時代はみんな数百年にわたり殺し合いをやり、ようやく江戸時代に安定期を迎え、そこから新しい学問が生まれてくると言うのです。

その様子を記述するなかで、小林は「下剋上」について、「此語、でもくらしいトモ解スベシ（この語、デモクラシー

豊かで多様な(近世)のすがた

日本近世史を 見通す 全7巻

刊行中 各3080円

●伝統と改革の時代

村和明・吉村雅美編 近世中期
5代将軍綱吉から田沼意次の時
代までの政治と社会に迫る。

●地域からみる近世社会

岩淵浩治・志村 洋編
災害、不況、労働…。近世の百姓や
町人の生活から考える。

●●●=既刊 「内容案内」呈

渤海と日本

酒寄雅志著 なぜ両国の友好関係
はつづいたのか。近代の渤海史研
究の歩みにも着目。 4180円

藤原広嗣

北 啓太著 奈良時代最大規模の
内乱の首謀者となった生涯に迫る。
【人物叢書322】 2420円

平城京の 役人たちと暮らし

小笠原好彦著 税金や流通、治安、
祭祀、疫病流行などから、都の日常
をいきいきと再現。 2530円

鎌倉時代仏師列伝

山本 勉・武笠 朗著 運慶・快慶・
院尊・湛慶・隆円・善円…。時代の祈
りを造形化した39名。 2750円

描かれた中世城郭

城絵図・屏風・絵巻物
竹井英文・中澤克昭・新谷和之編
中世の人々が、その眼で見た城、
思い描いた城…。 3080円

明治の地方ビール

牛米 努著 全国醸造所・銘柄総覧
元祖「クラフトビール」の時代。酒づ
くり挑戦した軌跡。 4180円

日記と歴史百科が一冊で便利！

歴史手帳 2024年版
1320円

吉川弘文館

東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151
目録・呈 価格税込

長い戦国の世で多くの人がひどい目に遭ったあと、これからは自分も知識や学問を習得したい、そして自己や社会について考えていきたいという願望が広がり、学問の誕生に繋がったというわけです。それを象徴するのが中江藤樹でした。「近江聖人」と言われて藩から招聘されたもののそれを断り、田舎の母親のところへ本を読み続け、説き続

とも解すべし」という面白い定義を、『大言海』の注釈から引つ張っています。これはつまり、日本の下剋上はある意味デモクラシーだということです。貴族あるいは家柄などで既得権益を保持し日本を牛耳っていた人たちが、武力の前に没落していった時代が戦国時代であり、名門とか貴族とか、権威とかの支配の終焉を迎えることになりました。そこで一方で徳川幕府が生まれることになりましたが、他方で民間の人はまだ下剋上の気分が残っていて、貴族など誰か偉い人が絶対ではなく、それならば自分自身で学問をやってみようという願望が広がったのが、この江戸時代だということです。

け、そして日本中から弟子入り希望者が集まってきたのです。熊沢蕃山などその弟子が各地に散らばり、儒学などの学問が広がっていく。『本居宣長』では、こうしたことが述べられています。

なぜ私がこの話を『学問と政治』に書いたかと言いますと、前半のピアレビューの話と繋がっています。前半は、学問は権力によって指示されるのではなく、ピア、同業者がお互いに、自己規律しつつ助け合うことにより学問を発展させるという話です。ただし、それだけでは充分とは言えません。学術会議問題に関しても、社会がもっと関心をもち、学問の側に立って応援してくれるなければ、国からの介入に勝てないと思います。学者あるいは大学が、大学に籠って国家権力と対立しても勝てないことは歴史を見れば明らかです。もしそうでない可能性があるとすれば、それは日本に数多くいる読書人に掛かっていると思います。

日本は江戸時代から世界的に見ても識字率が非常に高い国です。今日なお、これだけたくさん本を読む人がいる国

は決して多くありません。フランスやアメリカの友人と話しているなかで、自分が書いた本の発行部数をお互い口にする、友人は日本の本の部数の多さに驚きます。つまり日本は読者の層がものすごく厚いのです。『本居宣長』を読んだ瞬間、そうだ、日本は江戸時代から学問を愛する人の層が厚い国なのだ、今後もそれを再生産していくことが重要なのだと思ったのです。

学問は、それを支える幅広い読者層の存在こそが大切です。少なくとも日本に限って言えば、学問を支える幅広い読者層がまだまだ存在します。それならば、我々が努めなければいけないのは、学問は面白いものだとみんなに思ってもらうことです。多くの人が、自分の普段の生活の場のなかで、自分も学問をしてみたい、研究をしてみたいと思う社会が、いまこそ求められていると思います。そういう意味で、重要なのは教師と学生、つまり教えたい人と学びたい人の出会い、そして出版だと思います。

出版の新たな展開

海外のユニバーシティプレスと日本の大学出版部の大きな違いとして、海外のユニバーシティプレスは学術書を読む人の層がある程度把握でき、それを明確なターゲットとしてビジネスモデルが出来上がっているように思います。逆にいえば、一般の読者がふと書店で学術書を手にとって読んでみるという可能性をあまり期待していない印象があ

ります。一方、日本の大学出版部の刊行物は、必ずしも研究者だけが読むのではなく、知的なものに関心のある一般の読者が読むことを想定したビジネスモデルであると理解しています。

ただ、いまはこの出版文化が大きく変容してきています。最後に、新たな展開を考える参考として、最近私の身の回りで起こったことを話したいと思います。

私は、東京の豊島岡女子学園で行った講義をもとに『未来をはじめ——「人と一緒にいること」の政治学』（東京大学出版会、二〇一八年）という本を書きましたが、そのとき編集の手伝いをしてくださったのが、高松夕佳さんです。高松さんは他社の出版・編集業務を手伝ってくださる一方、自分自身で出版社もやっています。いわゆるひとり出版社ですが、夕書房^{せき}という、つくばにある面白い出版社です。

この夕書房から本を出した方に、青木真兵さんがいます。この方は奈良県の吉野で「ルチャ・リプロ」という私設図書館を経営していますが、いろいろな知的なイベントを行っていて、非常に注目されています。

私の先祖は島根県の隠岐島出身ですが、その島のなかの地域興しで有名になった海士町の町長から、ある日いきなり電話がありました。「青木さんが今ここにいらっしゃるんです！」と聞かれて、どこの青木さんだろうと思っていたら、「吉野からいらっしやいました」と言うので、ようやく分かり

知泉書館

デカルト・エリザベト 王女等の書簡集 (知泉学術叢書 28)

フーシェ・ド・カレイユ編著
／山田弘明訳 新発見の書簡
を初めて世に紹介した貴重な
資料集 新書/326p/4200円

ヘーゲル全集 第10巻3 『論理学』主観的論理学： 概念論 (1816)

久保陽一編 『論理学』の三分
冊目。『論理学』と「形而上学」
の統合を見る。初訳の断簡4
篇を収録 菊/522p/8000円

スコットランド 啓蒙の社会理論 (知泉学術叢書 27)

ペリー／坂本達哉・壽里竜訳
世界的な研究者による定評の
概説。啓蒙思想に関心ある読
者必読 新書/508p/6200円

報復の書／

レーギノ年代記続編

三佐川亮宏訳注 オットー朝
四大叙述史料の二書を明快で
詳細な訳注で提供する基盤的
業績 A5/554p/8000円

清末民初書画碑帖 収蔵研究

下田章平 中国書画の一ジャ
ンル。書画碑帖(拓本)の収
蔵史を初めて体系的に解明し
た成果 A5/584p/8000円

方以智の物理探索 十七世紀中国の自然学と イエズス会の学術

齊藤正高 西洋の最新科学と
中国の古典的知識をすり合わ
せて独自の学問を形成した人
物を解明 A5/332p/5000円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
<http://www.chisen.co.jp>

ました。青木真兵さんが海士町と提携して、図書館を通じて地域を繋ぐ事業を行っています。とても素敵なことです。また別の話になりますが、評論家の東浩紀さんは、東京の五反田で「ゲンロン」という会社を自分でつくり、そこでカフェと称していろいろな人を引きイベントをやっています。このあいだ、朝日新聞の青山直篤さんと東さんと私の三人で「トクヴィルから問う民主主義とアメリカ」というイベントをやりましたが、これが凄まじく、夜七時から始まって終わったのが午前二時でした。さすがに呆れて「いい加減に終われ」と思ったのですが(笑)、お客さんたちはそこで七時間もじっくり聴いているのです。配信の方でも多くの書き込みがあり、凄く文化だなと思いつつ、これだけの人が聴いてくれることに感動しました。

東さんは「シラス」という配信システムを用いて定額と単発のふたつの料金システムで有料イベントを行い、ゲンロンという会社は経営的にそれなりに回っているようです。彼は会員向けに雑誌や書籍も出版していますが、五反田で

始めた活動が社会的に認知され、ネットと紙媒体をまたにかけて新しい出版文化をつくっていることに感心しました。私は、日本の大学出版部のような独特のカルチャーを持つ出版社に期待していますが、夕書房のようなひとり出版社や青木さんのやっているような私設図書館、さらには東さんのゲンロンみたいなところと、どこかでうまく繋がっていければ、どんどん面白いことが起きると思います。世の中にトクヴィルについて七時間も話を聴く人がいるのです(笑)。大学出版部がそのあたりを耕せば、何かいろいろなものが出てくるように思います。

政治と学問がきちんと距離を保つことによって、それぞれが健全な在り方となることを願います。そして健全な学問を支えるうえで、健全な出版社が結びつくことによって、日本はグローバルに開かれた知の共和国になると思っています。みなさまの今後のご活動に期待したいと思います。

(二〇二三年五月三一日)

■ 大学出版部協会創立六〇周年

“One Team”の営業部会をめざして

土橋由明

(大阪大学出版会)

二〇年前に思いをはせて

冒頭から私自身の話となりますが、今からちょうど二〇年前の二〇〇三年に、大阪大学出版会へ入職しました。当時は私を含めて三人しか職員がおらず、社内の仕事もまだおぼつかない中で、営業部会の担当として、大学出版部協会の活動に関わり始めました。当会の歴史は浅く、いわゆる生え抜き職員もいなかったため、異業種からこの業界へ飛び込んだできた私にとっては、まさに右も左もわからない手探りの状態で協会活動のデビューを迎えることとなりました。

そんな新参者かつ初心者私の最初に任された仕事は、大学出版部協会創立四〇周年記念フェアを大阪大学生協で開催するというミッションでした。この記念フェアは、営業部会が総力をあげて全国を横断するかたちで、各出版部の母体大学を中心とした大学生協書籍部で開催され、営業担当者が窓口となり運営を担っていました。当時の私はどこから手をつけてよいかさっぱりわからず、ひとりで抱え込んでいました

が、そんな姿を見かねてか、営業部会の諸先輩方が親身になって教え下さり、なんとか無事に乗り切ることができたことは今でも鮮明に覚えています。それから二〇年が経過して、その私が、今度は営業部会長として、六〇周年記念フェアに携わることになるとは、まったく想像すらしていなかったことです。

殿として、ともに歩む

今年は、一二年ぶりに営業部会長が交代するという変化に加えて、初めて地方の大学出版部に在籍する者が、営業部会長に就任するという部会史上の転換点ともいえ、私自身に何を期待され、何ができるのか、しばらくは自問自答する日々を送っていました。その答えはおそらく、部会長の役目を終えたときに、その軌跡を辿ることであろうとわかることかもしれないと、悩み続けることこそが大切なかもしれない。ただ、そのような中でも、ひとつだけ実行しようとしたことがあります。それは、「殿に徹しよう」ということです。今の営業部会は、私のような中堅から経験豊かなベテラン以外にも、新しく出版部に配属されたメンバーも在籍し、出版における経験年数、これまで歩んできたキャリアも多種多様です。また、大学出版部協会自体も、各出版部の法人形態やその規模と歴史、そして活動目的も異なるいわば多様性組織ともいえます。だからこそ、さまざまな視点から意見が交わされ、多彩な発想が生まれ、幅の広い協会活動につなが

っています。

その中で、部会長に求められるスタンスとは、自ら率先して先陣を切るよりも、営業部会というチームを広い視点でとらえて、^{しんがり}殿として後方から支えることではないかと考えるに至りました。このバラエティに富んだメンバーが、それぞれの個性や特性を發揮できるように、縁の下で支えながら、チーム全体として前進させていくことを肝要ではないかと考えています。また、二〇年前の私自身がそうであったように、出版経験が浅いメンバーがいれば、中堅・ベテランメンバーが情報を共有しサポートしていくなど、この部会内の伝統を引き継いでいくことは、未来のメンバーを育むという点からとても大切なことです。そのためにも、誰でも自由に意見できるような雰囲気を醸成し、まずは部会活動に参加してもらえらるような環境を整えていくことが、私の在任中に課された使命だと受け止めています。

「本を売る」こと

「営業部会」と銘打っている以上、「本を売る」ことを何よりも第一に考えなくてはなりません。「本を売る」ことは、編集者が企画を立て、著者が原稿を執筆し、印刷会社が本の形に仕上げ、営業担当者が販売促進を行い、取次と書店を経由して読者が購入して下さった結果から生じるものです。そしてそれは、ステークホルダーすべての要求が満たされた共通の目標です。この目標を達成できれば、それぞれが抱えて

いる問題の多くは解決されるでしょう。シンプルな言葉でありながら、奥深く、とてつもなく困難が伴うこの目標を追い求めて活動を続けていくことが、今もこれからも営業部会の最大のテーマであることには変わりありません。そのためにも、協会活動だからこそできるダイナミックな企画や各出版部による細やかな活動など、虫の目、鳥の目、魚の目を使い分けながら、メンバーとともに歩んで行きたいと思っています。

* 活動報告——六〇周年記念フェア&地方研修会

・六〇周年記念フェアを前期は東京を中心に、後期は関西方面の大学生協や書店を中心に開催しました。
・コロナ禍により二〇一九年以降中止となっていた地方研修会を関西で再開し、各書店へ表敬訪問を行いました。



■ 大学出版部協会創立六〇周年【鼎談】

本づくりと棚づくりに魅せられて

——慶應義塾大学出版会×ジュンク堂書店

村上文×森 暁子×井手ゆみこ

『大学出版』記念号企画として、ジュンク堂書店池袋本店の書店員と慶應義塾大学出版会の編集者が鼎談を行った。言うまでもなく、ジュンク堂池袋本店は学術専門書も勢揃いする書店の代表格であり、森暁子さんは副店長として、井手ゆみこさんは人文書フロアの責任者として、学術出版社と読者を繋ぐキーパーソンとなっている。

慶應義塾大学出版会の村上文さんは、学術成果の波及に奮闘する編集者として、『芸術の言語』（ネルソン・グッドマン著、二〇一七年）、『中国料理の世界史』（岩間一

弘著、二〇二二年、サントリー学芸賞受賞）など話題書の編集を手掛けてきた。

一時間半に及んだ鼎談は、日々の苦労や悩みを交えつつも、明るく力強いものであった。今後を担う世代同士が交わした率直な対話を、お楽しみいただきたい。

（写真撮影 東京大学出版会・晴山秀逸）

（司会・構成 東京大学出版会・山田秀樹）

—— 本日は、ジュンク堂書店のおふたりと慶應大学出版会の編集者にお集まりいただきました。三人はジュンク堂書店のイベント開催などを通じて懇意にされている様子ですが、まずはジュンク堂の森さんと井手さんから、池袋本店とご自身の仕事の紹介をお願いします。

森 ジュンク堂書店池袋本店の森です。まずはジュンク堂池袋本店についてですが、特色として重きを置いているのは、学術書・専門書を含めて可能な限りすべての本を揃えることです。来店される方をがっかりさせることのないよう、在庫に目配せしてしっかり用意しておくことを一番の

ポイントにしています。

私に関しては、もともとは人文書コーナーの担当でした。専門書をしっかりと揃えたうえで、それらを書棚にどのように並べていくかという、いわば「棚づくり」をしていましたが、いまは副店長として、店全体の運営のほか、新刊・話題書の売り方やイベントの実施を考えたり、取材に対応するなど、対外的な窓口業務も担当しています。

井手 同じくジュンク堂池袋の井手です。私は森からフロア長を引き継いで、人文書コーナーを担当しています。さきほど森が言った「棚づくり」のほか、フェアの開催などをメインにしています。

——続いて村上さんから、慶應大学出版会とご自身の編集活動の紹介をお願いします。

村上 慶應義塾大学出版会の村上です。慶應出版会の編集体制は、人文書の編集を手掛ける編集一課、社会科学系を手掛ける編集二課、慶應義塾内の広報誌をつくったりする編集三課に分かれています。そのほか、通信教育部の事務受託なども行っているのが特色でしょうか。私は編集一課で人文書をつくっています。

——慶應の出版物は、私がいる東大出版会と比べると、勢いの良さというか、ノリの良さというのを感じます。

村上 はい。もちろん、いろいろと大外れもあり（笑）、それらが積み重なって現在に至っています。

——勢いある出版のあらわれと言えるかもしれませんが、最近の慶應出版会はジュンク堂でのイベントも多いですね。

森 『中国料理の世界史——美食のナショナルリズムをこえて』（岩間一弘著、二〇二一年）のトークイベントが最初のように思います。この編集担当は村上さんでしたよね？あのかきは池袋のガチ中華を店内に持ち込んでくださった、面白かった。

村上 私が編集をしましたが、刊行前からジュンク堂がすごく興味を持ってくださって、イベントの開催に繋がりました。

トークイベントのほかにも、店頭でのフェアのお手伝いをしました。私は以前は哲学書を多くつくっていましたが、そのとき思想系の棚を担当されていたのが森さんでした。哲学のフェアをやったり、音楽の哲学のイベントをしたり**森** ああフェアはすごくやりたかった。慶應出版会が趣向を凝らしたPOPをつくってくださるなど協力もあって、とても盛り上がりました。フェアに並んだ本がどれもすごく面白そうだったし。

井手 その著者の方々は若手が多く、新鮮でした。



森 暁子 氏

——そのイベントについて、コロナを受けてやり方や雰囲気など、以前と比べて変わったところはありませんか？

森 まったく違っています。二〇二〇年までイベントはリアル（対面）で毎月平均二〇本ありましたが、コロナ禍のトークイベントはずっと配信でした。二〇二二年ぐらいに少しだけお客様を会場に入れるかたちで再開し、いまは会場と配信の両方のスタイルが続いています。

ただ、オンラインイベントって実は手間もお金も掛かるんです。以前のトークイベントは割とフットワークが軽くアイデアが出てくるとスイスイ開催できたのですが、オンラインだと難しい。でも、やっぱりフットワークの軽いイベントもやりたいという思いがあって、最近は配信なしのイベントも増えています。

また、以前はどのイベントでも参加してくださる常連のお客様がいっぱいでしたが、いまはまだそのお客様にお会いできていません。お店に行ってイベントに参加するっていうあの頃の流れが、まだ全然取り戻せていない。そ

の一方、オンラインの会場参加チケットは割と埋まる傾向にあります。

もっとも、それは単に来店イベントとオンラインイベントの宣伝の仕方の違いによるものかもしれません。来店イベントが店内でのチラシやポスターを中心に宣伝するのに対し、オンラインイベントはSNSを中心に宣伝し、「当日来店できない方も観られます」と謳っているのです、そのあたりが集客力の差になっている気がします。来店イベントの宣伝をどうするかが、今後の課題です。

なぜイベントをやるかと言えば、ひとつはもちろんそのイベントで取り上げる本を売るため、もうひとつはお客様をお店に呼び込むためですから、会場参加型のイベントはやっていきたいと思います。

——イベントの変化以外にも、コロナを受けてジュンク堂が取り組まれた新たな試みはありますか？

森 私が新たに行ったことに、イチオシ棚の設置があるかもしれません。以前は、棚の端から端まで丁寧にご覧になられ、新刊台などもチェックされてから店を出るお客様が多かったのですが、コロナ禍のときはお客様の滞在時間がかなり減っていました。目的の本を見つけたらすぐにお帰りになるという具合だったので、それならパッと目に留まるコーナーみたいなものを用意しておく、そこをご覧に

なってご購入が狙えるのでは、あるいは本屋に来た楽しみが少しでも増すのでは、と思います、コロナの時期に試みた気がします。

村上 一階のところですか？

森 各フロアです。そのフロアに来るお客様が面白そうって思ってもらえる本を、敢えて他のフロアの本から選び、多面展開するコーナーをつくったのです。お客様は欲しい本があるフロアのほかはせいぜい一階の最新コーナーを見てレジに行くという感じなので、多層階にあるいろいろなジャンルの本と出会えていないと思って。

村上 お客様の滞在時間は戻ってない？

森 あまり戻っていないように感じます。そこで、書店員



村上 文 氏

各々に、自分のフロアのお客様のことを一番よく知っているのはそのフロアのスタッフだよ、他のフロアにあるさまざまなジャンルの本にもアンテナを張ってね、という教育的メッセージももちろん、それがお客様のためになり、売上にも繋がることを期待することです。そのほか、ジュンク堂全

体としては「honto with」の導入があります。ジュンク堂だけでなく丸善や文教堂の在庫もすぐに分かり、そこから取り置きもできるので、なるべくアプリをダウンロードしていただいています。あとはセルフレジかな。

——続いて村上さん、本づくりの立場から、森さんや井手さん、あるいはジュンク堂との交流のなかで感じたことはありますか？

村上 自分がつくった本にどういう反応があるのか、最初は分からないまま手探りでやっていたので、どのようにつくればジュンク池袋のアンテナに引っ掛かるのか、意識していたと思います。それが数打つなかで分かってきた感じがして、その到達点が『感情の哲学入門講義』（源河亨著、二〇二一年）をつくったときでした。このときは手応えを感じました。

ただ、残念ながら私はそのあと哲学書を担当する機会が減り、いまは同じ人文書ではありますが、歴史系にシフトしつつあります。

井手 そのシフトは主に村上さんご自身の関心の変化によるものですか？

村上 いろいろな要素はありますが、やっぱり私の関心です。

井手 個々の編集者の興味関心がベースになるのはすごく



氏 井手ゆみこ

良いですし、分野がシフトしても本がつくれるっていうのは凄いですね。慶應が出される本は、一般書・啓蒙書的なつくりでも、学術的要素もしっかり入っているように思います。

村上 学術出版社がつくる本のなかには、出版助成などを支えにした専門家向けの学術専門書と、幅広く世間一般向けの一般書・啓蒙書の、どちらとも言えない中間に位置する本が結構あります。ただ、その「中間」が「中途半端」なものになってしまっていると、「方向性はどっちなんだ」と思うところもあって、私はどちらかに振り切った方がいいと思っています。高度な専門書とするか、あるいは敷居を下げて一般書としてつくるやり方をしないと、中途半端になる気がして。

森 ジュンクは既発表論文を束ねただけの学術書も置きますけど、慶應出版会がつくる楽しいような本は、私たちも売り場をつくるとき楽しいです。

村上 何とかして一般の読者に繋いでいきたい思いはあります。常に一般の人々の視線を忘れずにいたいんです。学術書編集の世界にいと、仕事相手は大学の先生ですから、

アカデミアのなかで完結して徐々に周りが見えなくなるころがあるので、書店に行っているいろいろな本をしっかりと見て、時代のトレンドや社会問題に絡み合わせて読者の関心を惹き付ける編集をしようと。常にアンテナを張っておくのは大事だと思っています。

——「トレンド」という点で森さんと井手さんにお聞きしたいのですが、最近のお客さんのトレンドに変化はありますか？

井手 ジャンルとしては、フェミニズム、人類学、アナキズムなどの盛り上がりが二、三年ぐらいつと続いています。自分たちで考えたり議論の場を作っていたりする方が増えている印象は、すごくあります。

また、クラシックな哲学や思想の分野であっても、「古典」の掘り起こしというか、昔の本を再解釈するような本も増えていっているように思います。著者についても新しい世代というか、かなり若い方も増えていると思いますし、若い方の来店も最近が増えて印象はあります。

トークイベントも、コロナ前は四〇〜五〇代の常連さんが多かったのですが、いまは大学生ぐらいの方も結構いらっしやいます。とくに人文書の本をたくさん読みたいと思っている若い方が多い気がします。

森 ただ、以前のように毎週あるいは二週間に一回来店し

津波

暴威の歴史と防災の科学

ゴフ／ダッドリー 日本を含む世界各地の津波の歴史に学ぶ、様々な発生原因と防災の教訓。
千葉敏生訳 河田恵昭解説 ¥4620

民主主義の人類史

何が独裁と民主を分けるのか？

スタサヴェージ 古代デモクラシーを専制と比較し民主主義の生存条件と近代デモクラシーへの変質を分析。立木 勝訳 ¥5500

検閲官のお仕事

ダーントン 仏・印・東独の歴史を並列し、三つの体制のありようから検閲とは何かを炙り出す。上村・八谷・伊豆田訳 ¥5500

統一国家なき国民

もう一つのドイツ史

ランゲヴィーシェ 神聖ローマ帝国以来の連邦主義に注目し、帝国（ライヒ）の意味を捉え直す研究最前線。飯田芳弘訳 ¥3960

コルチャク ゲットー日記

ワルシャワ・ゲットーで多くの子どもと生活し、共に収容所に消えた著者最後の3カ月の日記。田中・菅原・佐々木監訳 ¥4180

フォルモサ・イデオロギー

台湾ナショナリズムの勃興 1895-1945
呉叡人 日本の植民地支配下で台湾人はいかに自らのナショナルを想像／創造したか。葛藤の過程を描く。梅森・山本訳 ¥6050

ヤーゴブソン/レヴィ=ストロース 往復書簡

1942-1982
20世紀の偉大な知性が生涯の友情に結ばれ交わした初公開の文書群。《構造主義》生成の現場に光を投じる。小林 徹訳 ¥8800

東京文京本郷
2丁目20-7
rel.3814-0131 fax.3818-6435(税込)
www.ms2.co.jp

みすず書房

村上 二〇二二年に『地下出版のメディア史——エロ・グロ、珍書屋、教養主義』（大尾侑子著）という本をつくったとき、古本屋の方にお世話になりました。古本の世界はかなり大きな産業となっているのですが、もともと本は新刊として生まれてくるわけなので、書店に新刊がしつかり並んでそれを買う人が出てこないとい、古本も成り立たないことを感じました。

てくださる方や、カゴ一杯に本を入れて購入してくださる方は少なくなっているように思います。単に忙し過ぎて店內をゆっくり見ていられない方もいらっしゃるのでしょうか。文フリなどのブック系イベントがものすごく盛り上がりつつある一方で、書店はすごく厳しいと言われていて、果たして読者ってどこにいらっしゃるのかなって思います。文フリのようにイベント化されると、グッズを買う感覚で本が勢いよく売れるのですが、そういう方が日常的に書店に来ているかという、必ずしもそうではない。でも潜在的に本を読む層はいる。

それとの関連では、古本屋と同じように少し特別感ある書店として、最近流行の独立系書店についてはどう思いますか？

森 個人経営の厳しさや大変さはあると思いますが、書店って個人でやってこそ醍醐味が味わえるところもあるでしょうから、社会の動きにアンテナを張りつつ、店に置く本を自分で判断して選んでいくのは良いことですよ。あと、最近いわゆる「町の本屋さん」がどんどん消えてますよね。小銭握りしめて子供が本や漫画を買いに行く場がないというのは、今後、本を読むという習慣自体に影響してくるように思うので、気軽に徒歩で行ける本屋さんですごく大事だと思っています。独立系書店は町の本屋さんのような多彩な品揃えではないので、その肩代わりができるかは分からないのですが、立地としては住宅街にある店も多いので、そういう役割も担っていただけたのかな、と思います。

井手 ジュンクのような総合書店はすべての本を取り揃え

たいところなので、スタッフ個人の判断で仕入れる本を選ぶのは難しいのですが、独立系書店はいわゆるセレクトショップですから、店ごとに「色」があつて面白いと思います。

森 もちろん、「セレクト」しているので品揃えには限界があつて、物足りなさを感じてくる方も出てくるように思いますので、そのような方にはジュンクのような総合書店にお出掛けいただくことを期待しています（笑）。それぞれの役割があるなかで、行きつけの書店が増えることは大歓迎です。

——村上さん、本づくりの立場から、最近気になることや感じていることはありますか？

村上 本を出せる時期と出せない時期に偏りがあつて、そのコントロールが難しいですね。執筆者は大学の先生が多いこともあり、先生方が大学の夏休みの終わりまでに書き上げた原稿が、九月末に洪水のように押し寄せるという状況になりがちです。そうなるとう版も翌年の二月から三月に掛けて集中するので、もう少し満遍なく出したいですね。ただ、手許に原稿がないときは、「種まき」の時期と心得て、とにかく企画を立てまくる、打ちまくる（笑）。もちろん、クオリティを保つことは大事ですし、それは会社全体としても意識していますが、やっぱり数を打つことつ

て大事です。

——いまはどの方向にアンテナが向いているのでしょうか？ さきほど井手さんが、ここ数年途切れることなく盛り上がりつつあるテーマとしてフェミニズムや人類学を挙げていましたが、そのあたりですか？

村上 例えば「ジェンダー」について言えば、それが私の編集の大きな柱になっているとは言えませんが、歴史系の本を企画するなかで女性的な視点を入れるというかたちで、ジャンルを横断して新しさを追求しています。

森 そういう本はスパッと収まる棚がなかったりするので、私たちとしてもすごく楽しいです。

——私などは、書店の棚にスパッと収まらない本は困ると営業部から言われることもあります。それでもないと？

井手 全部がウエルカムというわけではないのですが（笑）。ひとつのジャンルに収まらない本は必ず出てきますが、そのことを意識してつくったわけでもなく、何となくつくったと見えてしまう本もありますから……。

そのような本は、店に届いて棚に並べようとするとき迷つてしまい、本を理解するのに時間が掛かつてしまいます。

いくつかの棚に置くにしても、本の狙いが見えてくればス
ムーズにできますね。

森 その点、慶應は、どのような方に届けたいか、という
戦略をきちんと立ててくださるので、置きやすいです。

—— 続いて森さんと井手さんに、他の大学出版部にも話
を広げるかたちでお伺いしたのですが、大学出版部の本
をどのようにご覧になっていますか？ 改善点や期待も
含めてお聞かせください。

森 必ずしも大学出版部の本ではないのですが、いままで
書いた論文を束ねただけの専門書が本場に多い気がします。
もちろんそれがすべて悪いわけではないのですが、本とし
て纏めるというのは、誰にでも開かれ、誰にでも読めるよ
うに書店に並べられることですよね。書店は入場制限もな
く自由に行き来できる場所ですから、そういうところに置
かれる可能性を考えると、もったいないと思います。

例え論文をベースとした本であっても、そのある部分だ
けでも読みたいって思わせるようなつくりかたはできるよ
に思います。また、そう思われる方が増えるような装丁の
工夫も、できるように思います。

井手 名古屋大学出版会は、確かに学術出版ですごく硬い
ですけど、一般の方に購入されることが多いです。書店員
としても、内容についての安心感というか、信頼感があり
ます。

森 テーマがいいですし、読みたいと思わせますよね。定
価も安くはないけど高すぎず、頑張って買おうと思ったら
買えるぐらいの、ギリギリのところを攻めてくる（笑）。

井手 あと、新しいジャンルやキーワードが出てきたとき
参考になる本がまったくないことがあるのですが、大学出
版部からそのあたりの流れを総括した本を出していただ
けると、私たちもお薦めしやすいかな。

森 例えばジェンダーなど流行りのテーマは有象無象に数
多くの本が出てくるわけですが、そのなかできちんとした、

新刊案内

上田喜三郎 編著

A5判 304頁 定価6380円

ハワイ移民漁師の生活史

和歌山県南部の漁村から移住し、ハワイ到着後すぐに漁師とな
り、21年間カツオを追う生活を送る。漁業で成功をおさめたが日
米開戦により日系人漁業は壊滅する。戦中は強制収容所に入
れられたが戦後ハワイに戻り漁具商として再出発。カツオ漁師の
口述の生活史。

奥田宏子 著

A5判 392頁 定価5940円

宮廷詩人チヨースー 悲しみの道化師

中世ヨーロッパ社会文化史の窓から見たチヨースー。英仏百年
戦争の時代を二人の英国王のもとで宮廷詩人として生きた、
その悲しみを秘めた道化の姿を六百年の時を超えて明らかに
する。

御茶の水書房

〒113-0033 文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751

基礎文献となるような本を大学出版部には期待したいです。

——村上さんから、編集者として、これからの本づくりの方向性をお聞かせください？

村上 繰り返になりますけど、学術の成果を書店を通じて一般の方に届けられるような、多くの方に興味関心を示していただけるような本づくりを、これからも考えたいと思っています。

もちろん、その前提として、私自身が楽しいと思える本をつくるのが大事です。近々、私が最近ハマっているKPOPの本を出すのですが（笑）、日韓の国交が正常化した六五年を起点に、坂本九からBTSまでの両国のいろいろな格闘を、著者がいままで書いてきた新書などでは収まり切らないボリュームと密度で纏めたものです（金成^{キム・ジン}致著『日韓ポピュラー音楽史——歌謡曲からKPOPの時代まで』二〇二四年一月刊）。隣同士の日韓はさまざまな軋轢を抱えながらも、一方では、真似したり真似されたりという相互作用もあるわけで、そのあたりを大学出版部らしくガッツリと、しかし一般の方にも面白く読んでいただけるようご執筆いただきました。

——最後に、森さんと井手さんから、書店あるいは書店員の魅力と言いますか、普段のお仕事のなかでのやりが

いや面白さを教えていただけますか？

また、村上さんからは、本づくりの醍醐味や面白さを話しいただけますか？

井手 フェアなどの反応がダイレクトに返ってくるのが書店の現場ですので、そこでお客様に見ていただいたり、結果として売上が上がったりしたときにはすごくやりがいを感じます。また、若い方がいろいろ話しながら本を選んでいる姿を見ていると、そういう場を提供できていることをすごく嬉しく思います。

あとは、さきほど村上さんがおっしゃった「学術の成果」について、大学での研究成果への関心の差は人によつてかなり違うと思いますが、研究成果が重要であるってことをお店を通じて直接お客様にお伝えできるわけですから、そこは大事な仕事だなって改めて思いました。

森 基本的に書店は誰でも来れる場所なんです。ただ、私はこししばらく「読者はどこにいるのかな？」と思っていました。それこそ、自分で書店に来ることすら叶わない方や、一冊の本を読み通すことに苦勞する方もいる。身体的な問題を抱えている方だけでなく、本を読むことに慣れてない方も多くいる。

本屋は誰にでも開かれていて、棚には新たな出会いに繋がる本がいっぱいあると思ってきましたし、もちろんいまでもそう思います。そのなかで、本がまだ全然届いてない

方がすぐたくさんいることを頭の片隅にしつかり置いたうえで、売り場を作らなきゃいけないっていう思いはずっと抱えています。その思いがあればこそ、何かやるときにさらに裾野が広がって、もっと多くの、いろいろな方に来ていただける場所になるんじゃないかなっていう期待は心に留めています。

村上 つくる側の立場として、まずは本をつくることの一
番の目的は、学術研究の成果をできるだけ読みやすいかたちで本に纏め、読者に届けることだと思います。

学術は社会とどこかで繋がっていて、誰かのためになっていることを意識しながらつくり、その反応が時々見られるところが醍醐味というか面白いところですね。

ただ、学術書の場合は大部なうえに非常に限られた発行数部数ですから、反応が届くまで時間が掛かります。めげずに腐らずに頑張ることが肝要です（笑）。

森 専門書については、購入していただいたとしても、すぐに読むとは限らないですね。

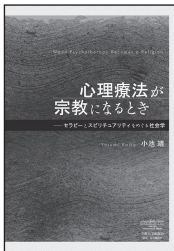
心理学は現代の「宗教」か？

心理療法が宗教になるとき

—セラピーとスピリチュアリティをめぐる社会学

小池 靖 著

カルト／自己実現／新自由主義 —個人と社会のセラピューティックな交わりは何を生んできたか？社会に浸透している心理学的発想について、個々の現象を多角的に考察し「セラピー文化」「心理主義」と呼ばれる社会の一面を検証する。



A5判上製・180頁
3080円(税込)

〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1
立教大学出版会
(発売:丸善雄松堂株式会社)



RIKKYO
UNIVERSITY PRESS

——学術専門書は長い時間を掛けて丁寧につくり込んでいくだけに、読者からよい反響をいただいたり、同じ専門家から高く評価されると、余計に嬉しい思いはありますね。学術出版社って出版業界のなかではマイナーですが、それでも社会の知の流れ全体を少しは変える可能性も持っていることは、忘れずに本づくりを続けたいと思います。

ジュンク堂と慶應はしつかりタッグを組んで学術専門書の盛り上がりに努めているわけですから、他の大学出版部も続いていきたいですし、そのためには出版部同士が協力や切磋琢磨しつつ、学術の世界の魅力を広めていく場を書店と一緒につくっていききたいと思います。
本日は、ありがとうございました。

(二〇二二年二月二日)

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

大学出版部協会・活動報告

一〇月一三日（金）一三時〇〇分～

第六回 営業部会 開催※

一〇月二七日（金）一五時三〇分～

第五回 理事会 開催※

十一月二日（木）一四時〇〇分～

第七回 営業部会 開催※

十一月九日（木）一四時〇〇分～

編集部会 秋季研修会 開催※

十一月一六日（木）一七時（金）

営業部会秋季地方研修会

於：奈良・大阪

十二月一日（金）一三時〇〇分～

第六回 理事会 開催

於：日比谷図書文化館

十二月一日（金）一五時〇〇分～

第四回 営業部会 開催

第四回 編集部会 開催

於：日比谷図書文化館

年末懇親会

（※）理事会・部会はZOOMでの開催

北海道大学出版会

▼齊藤マサヨシ著『ボーダーツーリズムの記録 1997-2022—国境に立って、感じて、撮った』（B5判・二二四頁・五七二〇円）日本最北端の境界地域・稚内を起点にユーラシアの陸と海をまわって稚内へと戻る「端っこから始まる旅」をテーマにまとめた写真集。多様性に満ちた境界地域の魅力を切り撮る。

▼原暉之・兎内勇津流・竹野学・池田裕子編著『日本帝国の膨張と縮小—シベリア出兵とサハリン・樺太』（A5判・四五六頁・七九二〇円）北サハリン保障占領は、日本帝国の膨張と縮小の歴史を象徴する興味深い事例である。日本史研究者とロシア史研究者の協力により、尼港事件を契機とした占領から撤収までを多角的に解明する。

▼池炫周直美／エドワード・ボイル編著『日本の境界—国家と人びとの相克』（A5判・一九八頁・三九六〇円）国境政策や外国人労働者など現在の日本が抱える社会問題を、境界をキーワードに国家と人びとの相克として分析する意欲作。

弘前大学出版会

▼石井忠・石水毅・梅澤俊明・加藤陽治・岸本崇生・小西照子・松永俊朗編著『植物細胞壁実験法（データベース更新版）』（B5判・四〇四頁・六〇五〇円）植物細胞壁の取扱法や分析法を「基礎編」と「応用編」の二部構成で紹介する、初学者にも使いやすい実験マニュアル。増刷に際し、よく使われる試薬や酵素、データベースなどの情報を最新版に更新。

▼小原良孝著『白神どうぶつ讃歌―白神の森で出あった動物たち』（A5判・一〇〇頁・三五二〇円）世界自然遺産・白神山地の動物たちを、動物学者である著者が撮り溜めた写真とその解説で紹介。動物たちの生活痕・足跡などのフィールドサインも盛り込み、白神山地の動物たちの息吹を感じていただける一冊。

▼吉川孝・横地徳広・池田喬編著『生きることに責任はあるのか―現象学的倫理学への試み』（四六判・三〇五頁・二七五〇円）生きることに責任が求められることなど、あるのだろうか。フッサールに始まる「現象学運動」を形作った哲学者たちに、「生と責任」をめぐる倫理的思考の消息をたずねた。好評増刷。

東北大学出版会

▼横地徳広著『戦争の哲学 自由・理念・講和』（A5判・二六八頁・三九六〇円）全体主義を崩す人間的自由、全体主義に執着の恣意的自由、そのあいだで国家は講和できるのか？ 戦争と政治の図式的地平を開くアスペクトの閃き、それに導かれた哲学者・指導者たちの理念と言葉を検証する。

▼鈴木啓一著『豚肉の生産科学』（A5判・一六二頁・二九七〇円）料理での使用頻度が高く、身近に感じられる食材の一つである豚肉。筋肉は運動や体の維持に重要な器官だが、死後は食肉へと変化する。量販店やスーパー等で販売される豚肉は遺伝的な影響と、給与される飼料や飼育環境の影響を受け肉質が決まる。豚の肉質を遺伝的に改良した著者の経験を踏まえ、生前での筋肉構造から死後の食肉への変化のメカニズム、さらに、おいしい豚肉質の科学的評価法、遺伝的改良や品種の違い、給与飼料内容や疾病、ストレス、さらには放牧などが肉質に及ぼす影響など、豚肉のおいしさを科学的に考えるための情報を提供する。

流通経済大学出版会

▼安福恵美子著『ツーリズム・プロダクトの社会的価値―「魅力」という表象』（四六判・一五四頁・一九八〇円）ツーリズムが成立する空間では、ツーリズムを構成する異なる主体の組み合わせにより、異なる価値が創出される。ツーリズムによって創出される「魅力」とは、誰にとつての魅力なのか。



▼日本交通政策研究会研究双書36『総合交通体系論の系譜と展開』（A5判・二九六頁・三六三〇円）昭和四六（一九七二）年に展開され、その後の交通政策論議に多大な影響を与えるようになった総合交通体系論の系譜、動向を論ずる。



聖徳大学出版会

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育—みんなで進める特別支援改訂3版』(A5判・二六七頁・一七六〇円) 初学者のための特別支援教育本。コンパクトなハンディサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

▼聖徳大学児童学部児童学科編『新しい児童学への招待』(B5判・一〇三頁・一三五九円) 幼児教育・保育・文化・心理の教授陣四〇名が協働制作した入門書。薄手の冊子に児童学のような素材が凝縮され学びやすい。

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『教職実践演習—幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』(B5判・一四〇頁・一七六〇円)

幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。

慶應義塾大学出版会

▼金成政著『日韓ポピュラー音楽史—歌謡曲からK-POPの時代まで』(四六判・三〇四頁・二七五〇円) BTS、TWICEなど、世界で爆発的人気を誇るK-POPアーティストたちの活躍の裏には、日韓がおりなす数十年にわたる戦後史があった。日韓の大衆がともに見た「POPの夢」がいま開く。

▼マーク・ロスチャイルド著／鳥谷昌幸・昇亜美子訳『なぜ陰謀論は生まれるのか—Qアノンとソーシャルメディア』(四六判・三七六頁・二九七〇円) アメリカ議事堂乱入事件に発展したQアノン現象。世界的に議論を呼んでいる、陰謀論を拡散するソーシャルメディアのしくみと社会背景を探るノンフィクション。

▼土田千愛著『日本の難民保護』(A5判・二五六頁・四二〇〇円) 日本は「難民鎖国」なのか。日本は、難民政策をとりにながら、いかにして出入国管理における国家主権を維持してきたのか。「庇護希望者」に、いかに救いの手を差し伸べるべきか。戦後日本の出入国管理政策の政策形成プロセスを丁寧に検証し、難民保護の実態を明らかにする。

専修大学出版局

▼植田敦紀著『環境会計各論』(A5判・一九二頁・二九七〇円) 環境問題、環境保全を経営理念に入れた事業活動が求められる現在、環境会計の考え方が重視される。本書では、環境問題についての世界的・企業の取組みを踏まえ、企業の環境活動における環境会計の構築と展開を考える。また、発展的テーマとして生物多様性の会計と自治体の環境会計を取り上げる。二〇二三年二月刊行の『環境財務会計各論』の兄弟本。

▼藤本一美著『戦後政治と「首相演説」1—一九四五—一九六四』(A5判・三二六頁・三七四〇円) 戦後の首相たちはいかなる形で日本の現状と将来の姿を国会議員や国民に伝えてきたのか。施政方針演説、所信表明演説と新聞報道の分析を通して戦後政治の一端を探る。今巻では、一九四五年から一九六四年佐藤内閣発足までを取り上げる。



玉川大学出版部

▼中井俊樹・宮林常崇編『大学の教務Q&A 第2版』（A5判・一八〇頁・一九八〇円）大学教育を支える教務の業務を遂行する上で知っておきたい実践的知識をQ&A形式で学ぶ、好評書の第2版。経験豊富な職員らが、入学・学籍・履修などカテゴリー別に、現場で蓄積した知識や具体的な対応策を回答。今回、コロナ禍や大学設置基準改正等を経た環境の変化と現場の声を反映し、大幅に改訂した。短大、高専にも好適。



▼小泉凡著『小泉八雲と妖怪』（A5判・一七六頁・二七五〇円）明治時代にヨーロッパからアメリカを経て日本にやってきた小泉八雲。彼は、自然とともに生きる日本文化の魅力にとりつかれ、日本人のだれもが知る多くの怪談作品を生み出した。（見えざるもの）に魅かれ、名もなきものたちの声を聞きつづけたその生涯を、八雲自身が語るスタイルで描く（一人称の伝記）。

中央大学出版部

▼早田幸政著『グローバル時代における高等教育質保証の規範構造とその展開』（A5判・五六八頁・七四八〇円）グロ―バリゼーションの急速な進展の中、世界の大学改革では卒業の証である「学位」の質保証の効果を各国で相互承認する仕組みの形成が今日の課題である。本書は、海外の大学質保証関連の法制を我が国のそれと比較し考察する。

▼山内惟介著『気候危機とドイツ国際私法』（A5判・五三六頁・七〇四〇円）政治や経済は、われわれの生活に深刻な影響を及ぼす気候変動への対策に取り組むが、自然の権利の制定等、国家法上の対処には限界がある。気候危機の克服に向けて、世界の司法と法学に実践可能な打開策を提示する。

▼小森谷徳純・章沙娟編『コロナ禍・ウクライナ紛争と世界経済の変容』（A5判・二〇二頁・二六四〇円）貿易、国際資本フロー、国際関係、国際秩序などのアプローチからコロナ禍とウクライナ紛争が世界経済に及ぼす影響を根本的に検証する。

東京大学出版会

▼池田真歩著『首都の議会―近代移行期東京の政治秩序と都市改造』（A5判・三八四頁・七七〇〇円）江戸から東京へ、対立と葛藤のなかで変貌する議会政治に近代日本の歩みを克明に描き出す。第45回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）、第49回藤田賞（奨励賞）受賞！

▼森千香子著『ブルックリン化する世界―ジェントリフィケーションを問う』（四六判・三八四頁・三五二〇円）人種やジェンダー、階級による「分断」が錯綜する時代に、住民たちの日常生活と闘争、そして「共生」への試みを探る。

▼吉田寛著『デジタルゲーム研究』（四六判・四三六頁・四六二〇円）日本のゲーム研究を牽引する著者によるゲームを考えるための必読文献。知覚や認知、ゲームプレイ、メディア、音、eスポーツ、文化資源など、多面的に論じる。

▼佐藤喜和著『アーバン・ベア―となりヒグマと向き合う』（四六判・二七六頁・四四〇〇円）なぜヒグマは都市に出没するようになったのか。野生動物と人間の関係に何が起きているのか。ヒグマの生態からその謎に迫る。

東京電機大学出版局

- ▼マリリン・コ克蘭著「ミス他著」／木場裕紀・櫻井直輝訳『アカウンタビリティを取り戻すーアメリカにおける教師教育改革』(A5判・三四〇頁・七〇四〇円) 著名な執筆者による多くの賞を獲得した書籍の邦訳版。教師教育のあるべき姿について積極的な提案。誰にとつての何のためのアカウンタビリティ(説明責任)なのかを鋭く問う。より民主的で公平な未来を協働で作り上げるといふ営為を取り戻すため、教師教育に限らず、現在行われている教育のあり方を捉え直す。
- ▼村木正芳編著『Inventor による3D CAD入門 第2版』(B5判・一六〇頁・二七五〇円) 冗長な解説は極力なくし、実習を通じて操作を学ぶ。一つのものから作り上げる工程を手順に沿って実習することで、達成感・満足感とともに、CADの操作法を確実にマスターできる。
- ▼吉川忠久著『第二級アマチュア無線技士試験 集中ゼミ』(A5判・四〇八頁・三三〇〇円) 国家試験受験者のために、この一冊で合格できるようまとめた。近年の出題傾向を踏まえ問題を厳選。

法政大学出版局

- ▼ラクーラバルト、ナンシー著／柿並・大久保・加藤訳『文学的絶対ードイツ・ロマン主義の文学理論』(四六判・七四四頁・六六〇〇円) 文学の近代を開始した雑誌『アテネウム』とは何か? ▼Th・レッシング著／田島正行訳『ユダヤ人の自己憎悪』(四六判・三七六頁・四四〇〇円) ユダヤ人自身による反ユダヤ主義的な「自己憎悪」現象の原因を考察した、一九三〇年発表の重要作。
- ▼P・B・プレシアド著／藤本一勇訳『テスト・ジャンキーー薬物ポリノ時代のセックス、ドラッグ、生政治』(四六判・五一六頁・四四〇〇円) トランスジェンダー哲学者が自らの性別移行を物語る。
- ▼S・ベンハビブ著／加藤泰史監訳『逆境の中の尊厳概念ー困難な時代の人権』(四六判・四三六頁・五二八〇円) 主権の危機 ジェノサイド。現在もなお紛糾する問題から、人間の尊厳を問い直す。
- ▼R・ハリーディー著／鈴木・山本・金城訳『パレスチナ戦争ー入植者植民地主義と抵抗の百年史』(四六判・四〇六頁・三九六〇円) サイドなどの知識人と親交のあったパレスチナ研究大家の初邦訳。

武蔵野大学出版会

- ▼武蔵野大学サステナビリティ学科編著『キーワードで知るサステナビリティ』(A5判・二〇八頁・二二〇〇円) 「サステナビリティ学」において重要なキーワードを抽出・整理し、その定義や重要性、応用・実践例等を解説している。



- ▼池田眞朗編著『検討! ABLから事業成長担保権へ』(A5判・二五六頁・三三〇〇円) 担保法制シンポジウム「検討! ABLから事業成長担保権へ」中小企業金融の近未来」の全報告を収録・再現し、それらを補充する三論稿を掲載した、武蔵野大学法学研究所叢書の第二弾。



武蔵野美術大学出版局

▼千葉真智子、gallery α M編『α M プロジェクト2022 判断の尺度』（B5判・一四〇頁・二二〇〇円）本学が運営するノンプロフィット・ギャラリーにおけるゲストキュレーター千葉真智子による展覧会「判断の尺度」の記録集。

作家における選択と判断／メディアウムの批評性／他者の召喚／正しさと社会の結合点／主体はどこにあるか——判断をめぐる五つの視点に依拠て選ばれたアーティスト五組。高柳恵里「比較、区別、類似点」、加藤巧「To Do」、荒木優光「そよ風のような、出会い」、大木裕之「egg/helle」とらさんの墨汁針」、高嶋晋一「中川周「無視できる」。正しさを超えて区別し、言葉を与えよう」とすること。それには手垢のついた言葉自体を作り直す必要がある。造形＝言葉を練り、抛り所にする事で、尺度自体について問い、判断自体を創造的に作ることができるのではないだろうか。

会場風景、ステイトメント、アーティスト・トークの再録に加え、千葉による各作家の論評、星野太の寄稿「判断不全」を収録。

明星大学出版部

▼樋口修資著『第3版 教育の制度と経営 15講』（A5判・二九八頁・二六四〇円）本書は、主に教職を志す学生の利用を想定していますが、これら教職志望者にとどまらず教育に関心を寄せる一般の方々にも広く読んでいただけるよう、学校教育の制度・経営に関する仕組みの現状とその課題等に関する事柄を、15のテーマに分けて、できる限りコンパクトにわかりやすく紹介する内容となっています。



▼須藤康介著『教育問題の「常識」を問い直す―いじめ・不登校から家族・学歴まで 第2版』（四六判・二七六頁・一九八〇円）本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどれが本当で、どれが誤解なのかを検討して行く。そして、本当としたらその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。

早稲田大学出版部

▼司馬彪著／劉昭注／渡邊義浩訳『後漢書志「一」』（文庫判・五〇八頁・一三二〇円）制度史に当たる「志」を取り扱った、好評「後漢書」シリーズ第三巻。

▼本野英一著『盗用から模造へ1880-1931―中日英米商標権侵害紛争史』（A5判・四二二頁・五五〇〇円）現在世界中で問題になっている、中国企業による外国製品商標の侵害行為。その手法は、明治期に日本企業が西洋企業製品を標的に行っていた方法と、それを合法化していた日本政府の法解釈を取り入れたものだった。国内外の膨大な文書を通じて、知られざる歴史的事実を明らかに。

▼福村真紀子著『結婚移住女性のエスノグラフィ―地域日本語教育の新しい在り方』（A5判・二七〇頁・四四〇〇円）夫の国である日本に移住したものの、日本語が自在に操れず、孤立する結婚移住女性。出自国と日本との経済格差のため、に弱い立場に置かれがちな彼女たちは、社会で活躍する機会を奪われ、人的ネットワークも築けない。彼女たちのコミュニケーションの力をいかに育てるか、エスノグラフィーを通じた論考と提案の書。

関東学院大学出版会

▼出村彰監修／バプテスト史教科書編纂委員会編『見えてくる バプテストの歴史』（A5判・二三四頁・二二一〇円）
二〇二三年は、バプテストの日本宣教一五〇周年という記念の年であった。しかし、二〇一一年に本書が刊行されるまで、バプテストの教育機関における包括的なバプテスト史の邦語教材は存在しなかったと言っても過言ではない。そのような状況の中で連盟、同盟等、バプテスト内の教派を超えた研究者の意見が一致して完成されたのが本書であり、今もなお本学のみならず、他のバプテスト系大学においても教科書として使用されている。
内容は、十七世紀、英国初期バプテスト派の誕生から、十九世紀までの発展、その後、米国でプロテスタント最大の教派のひとつまでに成長し、日本へも伝えられたバプテスト教会の教会史。出村彰氏を監修者に迎え、共同執筆されたベシツクなバプテスト通史である。

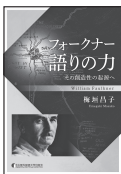


名古屋大学出版会

▼李昊著『派閥の中国政治―毛沢東から習近平まで』（A5判・三九六頁・六三八〇円）政争の展開に隠然たる影響を及ぼしてきた中国共産党の派閥。その実態とダイナミズムをクリアに描き出し、権威主義体制にとつての派閥の意義を解明。
▼齊藤誠著『財政規律とマクロ経済―規律の棚上げと遵守の対立をこえて』（A5判・四六八頁・四九五〇円）現状をどう見ればよいか、この先どうなるか。透徹した分析により、危機対応の方針も含め政府・日銀のなすべきことを明確に提示。
▼沢井実著『日本帝国圏鉄道史―技術導入から東アジアへ』（A5判・三四〇頁・六三八〇円）帝国の「骨格」はいかに形成されたのか。戦後へ継承される一大鉄道ネットワークの構築に至る歩みを描き、鉄道史を新たな次元に開く。
▼伊藤之雄著『維新の政治と明治天皇―岩倉・大久保・木戸の「公論」主義 1862～1871』（A5判・八三四頁・一〇七八〇円）幕末・維新のリーダーたちはいかにして政治的意思決定を行ったのか。倒幕から廃藩までを一貫した視座で捉え、新たな維新像を示す渾身作。

名古屋外国語大学出版会

▼根無一信著『はじめての比較宗教学』（A5判・二四八頁・二二〇〇円）ネム船長の哲学航海記第二弾。哲学が人間とは人生とは何か、どう生きるべきかを考えることであるなら、宗教は哲学の一種の表現だ。重要なのは宗教について自力で考える力を身に付けること。楽しく学べる宗教学入門。（二〇二三年九月刊行）
▼梅垣昌子著『フォークナー 語りの力―その創造性の起源へ』（A5判・四七〇頁・四九五〇円）「フォークナーが作家として何より重きを置いていたのは、人間の魂の深奥から発せられる生の叫び声だった……」著者が、半生をかけてまとめた精密な論考。（二〇二三年一〇月刊行）
▼今泉景子著『ホスピタリティを磨く20のレッスン』（A5判・価格未定）航空会社のグランドスタッフ経験のある著者が綴ったホスピタリティ実践の極意。（二〇二四年三月刊行予定）



京都大学学術出版会

▼西洋古典叢書編集部編『西洋古典名言名句集』（四六判・二五四頁・二六四〇円）名言名句の宝庫ギリシア・ローマの作品群より、誰しも耳にしたことのある名句から、ここでしか出会えない名言まで、一〇〇〇余を選び、ハンデサイズでお届け。項目の説明やコラムを付した『西洋古典叢書』生まれの信頼の一冊。

▼清水展著『アエタ 灰の中の未来―大噴火と創造的復興の写真民族誌』（A5判・三〇〇頁・予価三一九〇円）二〇世紀最大のピナトウボ大噴火によって甚大な被害を被ったフィリピンの先住民アエタ。その大災害に遭遇し否応なく彼らの苦難に巻き込まれ、その強靱な復興力を目の当たりにした人類学者が、多数の写真で復興の物語を報告する。

▼河合香吏・竹ノ下祐二・大村敬一編『新・方法序説―人類社会の進化に迫る認識と方法』（A5判・三八〇頁・四二九〇円）人とサルでは同様に見える行動も同様に観察・記述できない。では異領域間で対象と方法を共有する「辞書」はどうすれば作れるのか？学際研究を真に有機的に組織する方法論作りのために。

大阪大学出版会

▼姫岡とし子・久留島典子・小野仁美編『ひと』から問うジェンダーの世界史第2巻 「社会」はどう作られるか？ 家族・制度・文化』（A5判・二八四頁・二六四〇円）時代や地域によってさまざまな社会を構成してきたジェンダーのメカニズムを説明。文明圏の比較やイスラーム圏解説も充実。

▼安岡健一監修／大阪大学日本学専修「コロナと大学」プロジェクト編『コロナ禍の声を聞く―大学生とオーラルヒストリーの出会い』（四六判・二五二頁・二二〇〇円）コロナ・パンデミックの幕開けから二〇二二年に至るまでの大学関係者を中心とした市井の人々のオーラルヒストリー。

▼岡野翔太（葉翔太）著『二重読みされる中華民国―戦後日本を生きる華僑・台僑たちの「故郷」』（A5判・三九二頁・六六〇〇円）第二次世界大戦後の東アジア地域秩序再編下、中華人民共和国と中華民国の間でゆれる台湾系華僑の存在と自己認識を歴史的変遷から捉え直す。

関西大学出版部

▼永田憲史著『逐条解説「はじめの重大事態の調査に関するガイドライン」』（A5判・六八四頁・四七三〇円）文科省が二〇一七年に策定した重大事態調査手続ルールを、法律の研究者が規定ごとに詳説する。ガイドライン違反を回避し、重大事態への対処及び同種の事態発生の防止につなげるために、学校・教育委員会・いじめに関わる専門職にとって必携の書。

▼廣瀬幹好著『経済大国 日本の経営―豊かさのゆくえ』（四六判・二四〇頁・一八七〇円）一九八〇年代後半以降、欧米に対する日本型経営の優越性を説く論調が勢いを得た。この自画自賛の経営論は、バブル崩壊に続く九〇年代後半以降、日本企業の競争力低下とともに完全に鳴りを潜め現在に至る。いま求められているのは、企業の競争力の説明論ではなく、人々の生活を豊かにする経営論である。



関西学院大学出版会

▼田代歩著『消費税改革の評価―効率性と公平性の経済分析』（A5判・一九四頁・四八四〇円）年齢階級別の視点において軽減税率などの消費税改革のシミュレーション分析を行うことで、軽減税率が支持される条件や効果を考察し、経済社会に望ましい消費税改革の制度設計を論じる。

▼中村正憲著『新聞社デスク流 熱血作文教室』（A5判・一四四頁・一七六〇円）元朝日新聞記者の著者が、三〇余年の記者人生で得た文章術のエッセンス。実例とともに示される普遍的な「文章の基本」の数々が、あなたの文章を劇的に変える。関西学院大学での授業を書籍化。

▼山路勝彦著『美人座物語―近代日本のカフェ文化と東アジア世界』（A5判・三五六頁・六三八〇円）戦前的大阪・道頓堀に社交界の花形として美人座という名前のカフェが存在していた。昭和期の世相を語る時に無視できないカフェという文化装置を、東アジア世界という文脈において考察。

九州大学出版会

▼クラウス・ペーター・ホルン著／鈴木篤訳・解題『ドイツにおける教育学の発展史―二十世紀ドイツの教育学』（A5判・三八六頁・七四八〇円）戦前期ドイツおよび東西ドイツ両国での教育学の発展過程、そして教育学者たちのナチズム関与はどう扱われたのか、その解明に取り組む。

▼高長巖著『サービス論争の三〇〇年―欲求の視点に基づく一般理論の提案』（A5判・四四〇頁・九六八〇円）「経済のサービス化」が急速に進む中、長く続くサービスをめぐる論争を解決するため一般理論を欲求の視点から提案する。

▼安藤眞一著『隣に寝ている人、息が止まっているけど大丈夫？―循環器内科医が語る睡眠時無呼吸症候群（SAS）の話』（四六判・一五〇頁・一九八〇円）いびきがうるさいと注意を受けている人、たくさん寝ていても眠気に悩まされている人、SASではありませんか？本書では心臓病の専門医が心臓・血管病とSASの関係や治療法を分かりやすく解説します。（KUP医学ライブラリ3）

編集後記

▼一九八五年の創刊から間もなく四〇年を迎える『大学出版』は、今更ながら言うまでもなく、大学出版部協会のPR誌である。「大学と社会を結ぶ 知のネットワーク」をキャッチフレーズに掲げる協会が、「大学と社会を結ぶ」ため、大学―学問―出版をめぐる話題を深掘りし、併せて私たちの新刊を紹介してきた。

▼その編集スタッフとして、一〇年前の五〇周年記念号に続いて今回の六〇周年記念号の編集に携わり、ふたつの記念講演とじっくり向き合うことができた。前回の亀山郁夫先生による講演（「知と生命の大地を耕す」本誌九六号／協会HP公開中）と今回の宇野重規先生による講演は、視角や話題に違いはあれども、いずれも大学―学問―出版の現在と未来を見通すうえで示唆に富み、何より本の魅力を存分に語ってくれている。

▼七〇周年時は、誰が、何を語ってくれるのだろうか。「健全な出版社が結びつくことによって、日本はグローバルに開かれた知の共和国になる」（宇野先生）ために、大学出版部は切磋琢磨を重ねつつ、更に前進あるのみだ。

大同印刷(株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550 https://www.daidou-jp.com
ダイニック(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル TEL 03-5402-1811 https://www.dynic.co.jp
(株) 太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821 http://www.p-taihei.co.jp
(株) 太 洋 社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111 https://www.p-taiyosha.co.jp
(株) 竹 尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617 https://www.takeo.co.jp
(株) 東京弘報社	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3丁目22-A TEL 03-3291-5278
(株) とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200 https://www.toko-ai.com
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15 TEL 03-3632-0801
(株) トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288 https://www.talligent.jp
図 書 印 刷 (株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700 https://www.tosho.co.jp
(株) 日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431 http://www.nissinkoukokusya.com
(株) 日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528 https://www.nikkei.co.jp
日本宣伝販売(株)	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021 http://www.nihon-senden.jp
(株) 博 報 堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711 https://www.hakuhodo.co.jp
藤 原 印 刷 (株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191 https://www.fujiwara-i.com
(株) 平 文 社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301 http://www.heibun.co.jp
(株) 毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340 https://www.mainichi.co.jp
誠 製 本 (株)	〒175-0081 東京都板橋区新河岸3-13-1 TEL 03-4212-2735 http://www.makoto-seihon.com
(株) ミ ヤ コ シ	〒275-0016 千葉県習志野市津田沼1-13-5 TEL 047-493-3854 https://miyakoshi.co.jp/
名鉄局印刷(株)	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23 TEL 052-561-3272 http://www.meitetsukyoku.co.jp
(株) 遊 文 舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325 http://www.yubun.co.jp
(株) 読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111 https://www.yomiuri.co.jp

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

- (株) 朝 日 新 聞 社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 重 細 重 印 刷 (株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株) ア ベ ル 社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 東京三和ビル301
TEL 03-6256-8133 <https://www.abel-sha.com>
- 尼 崎 印 刷 (株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
TEL 06-6494-1122 <http://www.amain.co.jp>
- 英文校正エナゴ 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F クリムゾンインタラクティブジャパン
<https://www.enago.jp/>
- (株) A L E 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王 子 製 紙 (株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株)加藤文明社印刷所 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城 島 印 刷 (株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株) 条 川 印 刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- 港北メディアサービス(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- ㈱コングレゴロパルコミュニケーションズ 〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階
TEL 03-3510-3750 <https://www.congre-gc.co.jp>
- 三 松 堂 (株) 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
TEL 03-6823-5360 <https://www.sanshodo.co.jp>
- 三 美 印 刷 (株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
TEL 03-3803-3131 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三 立 工 芸 (株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三 和 印 刷 (株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信 濃 印 刷 (株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株) 渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株) 眞 興 社 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新 日 本 印 刷 (株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株) 精 興 社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikosha-p.co.jp>
- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766
TEL 075-255-2288 <https://www.soiei-pb.co.jp>
-



超越論的存在論

—ドイツ観念論についての試論

マルクス・ガブリエル著
中島新／中村徳仁訳
四六判上製 348 頁 定価 4,950 円
ISBN:978-4-409-03128-5

物自体への接近を論じるメイヤーらの思弁的実在論と、ヘーゲルを独自の形で解釈するブランダム、マクダウェルらの分析哲学の批判的検討により、カント以降のドイツ観念論を新たな存在論として再構成することを試みた力作。哲学者マルクス・ガブリエルの本格的出発点。



シェリング以後の自然哲学

イアン・ハミルトン・グラント著
浅沼光樹訳
四六判上製 456 頁 定価 6,600 円
ISBN:978-4-409-03129-2

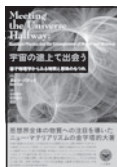
シェリングを現代哲学の最前線に呼び込み、カント主義批判により思弁的実在論の始原ともなった重要作。



反ユダヤ主義と「過去の克服」

高橋秀寿著
四六判上製 334 頁 定価 4,950 円
ISBN:978-4-409-51100-8

戦後、ドイツ人が「ユダヤ人」の存在を通してどのように「国民」を形成したのかを明らかにし、「過去の克服」に新たな視座を与える画期作。



宇宙の途上で出会う

—量子物理学からみる物質と意味のもつれ
カレン・バラッド著
水田博子／南葉結子／南晃訳
A5判上製 580 頁 定価 9,900 円
ISBN:978-4-409-03125-4

言葉と物質、人間と非人間の関係を独自のポストヒューマンズ的視点から捉え直し、哲学、科学論に重要な示唆をもたらす革命的著作。



ソ連の歴史

THE SHORTEST HISTORY OF THE SOVIET UNION

シェイラ・フィッツパトリック 著
池田嘉郎 監訳 真壁広道 訳
四六判並製 258 頁 定価 2,860 円
ISBN:978-4-409-51099-5

革命前史からソ連の勃興、スターリンによる独裁支配、冷戦、そして予期せぬ崩壊、今日のロシアにみられるソ連の影までもその複雑な歴史を生き生きとした筆致で描き出す、ソ連研究第一人者によるソ連全史！



「戦争ごっこ」の近現代史

—児童文化と軍事思想

サビーネ・フリーシュトゥック 著
中村江里／箕輪理美／嶽本新奈 訳
四六判上製 342 頁 定価 5,280 円
ISBN:978-4-409-52091-8

子どもや子ども時代が、いかに象徴的なものとして構造化され軍国主義への強力な修辞の道具として機能してきたかを検証する。



死 一有限性についての試論

フランソワーズ・ダステュール 著
平野徹 訳
四六判上製 300 頁 定価 4,950 円
ISBN:978-4-409-03127-8

死をめぐるさまざまな見解と対話しつつ、有限な生と切り離しえない死の相貌を描き出す、フランスの代表的ハイデガー研究者による渾身の作。



福澤諭吉

—幻の国・日本の創生

池田浩士著
四六判上製 368 頁 定価 5,060 円
ISBN:978-4-409-04126-0

現在の日本の社会を作り上げた福澤諭吉の思想を、その原文にふれながら読み解く。池田浩士書下ろし最新作。

◎北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

◎弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町 1 番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

◎東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

◎流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

◎聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

◎慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

◎専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

◎玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

◎中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

◎東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

◎東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町 5 番
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

◎法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北 3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

◎武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町 1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

◎武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

◎明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-591-9254

◎早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田 1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

◎関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

◎名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

◎名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

◎京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

◎大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘 2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

◎関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

◎関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

◎九州大学出版会

〒819-0385 福岡市西区元岡 744
九州大学パブリック 4 号館 302 号室
TEL 092-836-8256 FAX 092-836-8236

◎大阪経済法科大学出版部 (休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

〔発行所〕

一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北 1 丁目 14 番 13 号
メゾン萬六 403 号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <https://www.ajup-net.com/>

〔表紙デザイン〕 奥定泰之

〔表紙写真〕

中江藤樹の肖像
〔提供：首藤光一／アフロ〕



*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式 HP でも、PDF 版を全文無料でダウンロードできます

大学出版 137 号 (2024 年冬)

2024 年 2 月 15 日発行

頒価 100 円 (千共)